國學院大學学術情報リポジトリ

かもめさへだに：副助詞の相互承接の孤例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード (Ja): 副助詞, 相互承接, 意味の余剰, 土左日記, 金槐和歌集 キーワード (En): 作成者: 小柳, 智一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001700

かもめさへだに――副助詞の相互承接の孤例――

小柳　智一

キーワード：副助詞、相互承接、意味の余剰、土左日記、金槐和歌集

はじめに

『土左日記』二月五日の条に、次の和歌がある。

(1)　祈り来る　風間と思ふを　あやなくも　かもめさへだに　波と見ゆらむ　〈二月五日、四六頁〉

この歌で副助詞「さへ」と「だに」が相互承接しているが、実はこの相互承接は他に用例のない孤例である。この孤例の背後にどのような事情があるかを考察するのが本稿の目的である。事は副助詞の文法の問題にとどまらず、文学作品の表現の問題に及ぶ。

第一節　中古の副助詞の体系

最初に、中古語の副助詞に関して簡単に整理すると、中古語の副助詞は次のような体系をなすと考えられる（小柳（一九九七）、小柳（二〇〇三）、小柳（二〇〇八））。用例も挙げる。

	第一種	第二種		その他
		存在性	成立性	
単数的	ばかり	のみ	―	―
複数的	まで	さへ	だに　すら	など

(2) 紐ばかりをさしなほしたまふ。
〈源氏物語・葵、②五五頁〉

(3) いよいよ光をのみ添へたまふ御容貌などの、
〈源氏物語・行幸、③二九七頁〉

(4) あやしの法師ばらまで喜びあへり。
〈源氏物語・賢木、②二二〇頁〉

(5) 霧も深く露けきに、簾をさへ上げたまへれば、
〈源氏物語・夕顔、①一五九頁〉

(6) a はかなきほどの下衆だに心地よげにうち笑ふ。
〈源氏物語・澪標、②三〇二頁〉

b その人とは、さらに家の内の人にだに知らせず
〈源氏物語・夕顔、①一四三頁〉

(7) a 君すらも　まことの道に　入りぬなり　ひとりや長き　闇に惑はむ
〈後拾遺和歌集・巻17・一〇二六番〉

b 聖などすら、前の世のこと夢に見るはいと難かなるを、
〈更級日記、三二七頁〉

(8) a 大殿などにも聞きたまひて、
〈源氏物語・夕霧、④四五九頁〉

b 京になど迎へたまひてむ後、
〈源氏物語・蜻蛉、⑥二四二頁〉

まず、対象とする事物・事態の単複によって二つに分かれる。「ばかり」「のみ」は当該対象一つに限定するので、単数的である。「まで」「さへ」「だに」「すら」「など」は当該対象と同種・同領域のものが他にもあることを示すので、複数的である。

次に、統語的特徴によって、名詞句に直接してそれを対象とする第一種副助詞と、連用成分に後接して述語句までを対象とする第二種副助詞に分かれる。「ばかり」「まで」は前者、「のみ」「さへ」「だに」「すら」は後者である。例えば(2)「紐ばかりを」の「ばかり」は格成分内で「紐」に直接し、《紐》という事物を対象とする（差し直すのは紐だけ）。一方、(3)「[光を]のみ添へたまふ」の「のみ」は格成分に外から後接し、述語まで含めた《光を添ふ》という事態を対象とする（光を添える一方である）。「など」は(8)aとbのように両方があり、両種にまたがる。

最後に、第二種副助詞は、対象とする事態の様相によって、存在性の「のみ」「さへ」と成立性の「だに」「すら」

に分かれる。「のみ」「さへ」が対象とする当該事態は存在しており、例えば(3)の《光を添ふる》ことも、(4)の《簾を上ぐる》ことも現にある。二つの違いは、「のみ」が当該事態が一つだけあるのに対し、「さへ」は別事態に加えて当該事態がある（詳細は後述）ところにあり、右に述べた単複の点で対立する。

「だに」「すら」が対象とする事態は、成立の蓋然性が問題になる。(6)aと(7)aの《下衆心地よげにうち笑ふ》こと、《君まことの道に入る》ことは存在しているが、「だに」「すら」の眼目はその存在性にはなく、これらの事態が成立する蓋然性の低さ（起こりにくさ）にある。また、(6)bと(7)bの《その人と家の内の人に知らする》こと、《聖など前の世のこと夢に見る》ことは存在していないが、これもその非存在性ではなく、この場合は成立の蓋然性の高さ（起こりやすさ）に眼目がある。そして、「だに」「すら」の文は、当該事態が成立の蓋然性低に反して成立すること、あるいは蓋然性高に反して成立しないことを表す（岡崎（一九九六：第八章））。

前掲表では第二種の成立性の欄にだけ「だに」と「すら」の二つが入っている。周知のように、この二つは文体的な使い分けがあり、和文では「だに」、漢文訓読文では「すら」が主に使われる（築島（一九六三））――一部の男性歌人の例外はあるが、和歌・和文で「すら」が使われるのは稀で、だから(7)の例は珍しい。ともに内容が仏教に関わるので、このことが関係するのかもしれない――。

上代の『万葉集』では「だに」も「すら」も使われており、「だに」が蓋然性高（とその不成立）、「すら」が蓋然性低（とその成立）を表し、意味の上で相補的に使い分けられていた（岡崎（前掲））。それが中古になって、それぞれの意味が拡大し、それぞれの文体で蓋然性高の場合にも蓋然性低の場合にも使われるようになり、意味上の相補関係から文体上の対立関係へ変わった。

上代の「だに」「すら」の文を形式化すれば、次のようになり、[1] 中古でも(6)b「家の内の人にだに知らせず」と(7)a「君すらもまことの道に入りぬなり」がこの形式である。もともとの意味と形式を保った姿と言える。

(9) a　だに（蓋然性高）――否定
　　b　すら（蓋然性低）――肯定

しかし考えてみると、蓋然性高と蓋然性低は二つの形式で表し分けなくても、蓋然性極を示す一つの形式があれば、述語との照応で、高側の極か低側の極かが解釈できる。要するに、次のように一つの形式Xがあれば足りる。

(10) a　X（蓋然性極）――否定　…蓋然性高に解釈
　　 b　X（蓋然性極）――肯定　…蓋然性低に解釈

中古になって、このXを和文では「だに」が、漢文訓読文では「すら」が担うようになったと考えられる。上代の「だに」になかった(10)bには(6)a「下衆だに心地よげにうち笑ふ」が、上代の「すら」になかった(10)aには(7)b「聖などすら、前の世のこと夢に見るはいと難かなる（非見ず）」が当たり、述語と照応して支障なく解釈できる。こうして中古の「だに」と「すら」はほぼ同義になったので、前掲表では二つを同じ場所に配した。[2]

さて、このような体系をなす副助詞同士が相互承接する場合を見ると、全体的に例は多くないが、次のように第一種の「ばかり」と第二種の「のみ」「だに」がこの順で承接した例が複数あり、注目される。

(11)　賤しき東国声したる者どもばかりのみ出で入り、
　　〈源氏物語・東屋、⑥八三頁〉

(12)　明けばまづ　たづねに行かむ　山桜　こればかりだに　人に遅れじ
　　〈後拾遺和歌集・巻1・八三番〉

逆の「第二種＋第一種」の順で承接した例はない。第一種が名詞句の表す事物を対象とし、第二種が述語句まで及ぶ事態を対象とすることを考えると、「第一種＋第二種」という順番には理由がある。例えば、(12)は次のような構造なので、この順で相互承接するのが当然である。

(13)　[[これ$_{第一種}$ばかり]$_{第二種}$だに人に遅れ]じ

このように、相互承接は意味と関わる。とすれば、このことを敷衍すると、第一種の「ばかり」と「まで」が承接したり、第二種の「のみ」と「さへ」「だに」「すら」が承接したりする例はないのだが、これも偶然ではないだろう。[3]すなわち、同じ事物や事態に対して単数的かつ複数的と捉えるのは、意味が衝突するので、単複で対立する副助詞同士は相互承接しないのだと考えられる。

それでは、複数的な第二種の「さへ」「だに」「すら」相互間ではどうだろうか。そこで問題になるのが本稿冒頭の「かもめさへだに」の例である。

第二節　かもめさへだに

「かもめさへだに」を考察する前に、『土左日記』の「さへ」と「だに」の用法を確認しておく。結論を先に言えば、特殊な点はなく、一般的な用法と変わらない。

まず、「さへ」の意味は一般に〈添加〉や〈累加〉と言われるが、その内実を詳しく述べると、時間的・価値的に自存する主要な事態に、それと同領域の、付随的に存在する副次的な当該事態を付け加えるというものである（小柳（二〇二三））。次例は、移動する船から見ると、遠方の山がまるで移動しているように見えることを詠んだ歌で、「さへ」は、自存した移動である《船漕ぎて行く》ことに、それに伴って生じた錯覚の移動である《山行く》ことを付け加えている。

(14)　漕ぎて行く　船にて見れば　あしひきの　山さへ行くを　松は知らずや　〈一月二十二日、三七頁〉

次に、「だに」の意味は前節で詳述した通りで、『土左日記』にも(10)a・bの両方に当たる「だに」の例がある。次の用例(15)は、普通はありそうな《一文字を知る》ことがないこと（それくらい無学である）を表し、用例(16)は太陽と都はどちらが遠いか、太陽は頭上に見えるが都は見えないので都の方が遠い（「日を望めば都遠し」）という漢詩を踏まえ、遠いにもかかわらず《日を天雲近く（＝頭上すぐそこに）見る》ことがあることを表している。

(15)　一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。　〈十二月二十四日、一六頁〉

(16)　「日を望めば都遠し」などいふなる言のさまを聞きて、ある女のよめる歌、

日をだにも　天雲近く　見るものを　都へと思ふ　道のはるけさ　〈一月二十七日、三九頁〉

この「さへ」と「だに」が承接したのが「かもめさへだに」だが、はじめに述べたように孤例である。「さへ」が「だに」の意味に接近した後代の例ならともかく、使い分けのあった時代の例なので、無視するわけにいかない。孤例であっても実例があるのだから、「さへ」と「だに」の承接は普通にあったと見なし、孤例であるのは偶然で、資料上たまたまそうであるにすぎないとするのも一つの判断である。しかし、孤例の取り扱いは単純ではなく、様々な場合

を考慮に入れる必要があり（小柳（二〇一九））、以下に述べる理由でこの判断は妥当でないと思う。

そもそもこの例で「さへ」と「だに」はどのような意味を表しているだろうか。「かもめさへだに」の和歌を、状況を説明する地の文と合わせて再掲する。

(17)「今日、波な立ちそ」と、人々ひねもす祈るしるしありて、風波立たず。今し、かもめ群れゐて、遊ぶところあり。京の近づく喜びのあまりに、ある童のよめる歌、

祈り来る　風間と思ふを　あやなくも　かもめさへだに　波と見ゆらむ　〈二月五日、四六頁〉

この歌は、風が止んで凪いだ海面にかもめが遊ぶ姿を白波に見立てて詠う。この歌はまた「久方の光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ」（古今和歌集・巻2・八四番）と同様の構文で、《風間と思ふ（＝海が止んでいる）》ことと《かもめ波と見ゆる》ことの併存を訝しがっている――海が静かに凪いでいるのに、どういうわけでかもめが白波のように見えているのか。

普通は「さへ」と「だに」は相互承接をしないので、どちらか一方を選ぶとすれば、次のような例から「だに」が適当だと考えられる。(18)と(19)のaは(17)と同じ構文の歌で、bはそれに準ずる歌である。

(18) a　嘆きつつ　返す衣の　露けきに　いとど空さへしぐれ添ふらむ　〈蜻蛉日記・上巻、九六頁〉

b　みま草を　燃やすばかりの　春の火に　夜殿さへなど　残らざるらむ　〈枕草子・二九四段、四四九頁〉

(19) a　恋しけく　日長きものを　逢ふべかる　夕だに〔谷〕君が　来まさざるらむ　〈万葉集・巻10・二〇三九番〉

b　宇多の野は　耳なし山か　呼子鳥　呼ぶ声にだに答へざるらむ　〈後撰和歌集・巻14・一〇三四番〉

「さへ」の現れる(18)は、先行する事態で十分なのに、加えてそれ以上の当該事態があることを訝しむ歌意である。「さへ」が対象とする当該事態は、先行事態と同領域で、かつその程度を上回る。(18)aでは《返す衣の露けき》ことに、それ以上の《空しぐるる》ことが付け加わり、bでは

《春の火みま草を燃やす》ことに《夜殿残らぬ（＝燃やし尽くす）》ことが付け加わっている。

一方、「だに」の現れる(19)は、先行する事態から予想される事態の反対、起こるはずのない当該事態が起こっていることを訝しむ歌意である。(19)aは《恋しけく日長き》ことからすれば、《逢ふべかる夕君来ます》ことが予想されるのに《逢ふべかる夕君来まさぬ》ことが起こっている。bは《宇多の野は耳なし山ならぬ（＝聞こえないはずがない）》のだから、宇多の野にいるあなたへ送った消息の返事が当然あるはずなのに《呼ぶ声に答へぬ（＝私の声に答えない）》ことが起こっている。

問題の「かもめさへだに」の歌は《風間と思ふ》状況で、波が立つはずがないのに《かもめ波と見ゆる》ことを訝しむ歌意と考えられるから、(19)と同じで、よって「かもめだに」とあるのが適当である。《風間と思ふ》と《かもめ波と見ゆる》は同領域ではないから、(18)と異なっており、「さへ」は適当ではない。「さへ」は余分である。

しかし、興味深いのは「さへ」があっても「だに」の意味と衝突しないことである。「さへ」が関係づける主要な先行事態と副次的な当該事態では、自存する前者に後者が付随するので、相対的に後者の方が成立する蓋然性が低く、「だに」の意味と合致するからである。ただし、「さへ」の本来の意味は活かされず、ただ余剰である。

前節で、同じ事態を単数的な「のみ」で捉え、同時に複数的な「さへ」「だに」「すら」で捉えるのは意味が衝突するので、「のみ」と「さへ」「だに」「すら」は相互承接しないことを述べた。「さへ」と「だに」の承接では意味の余剰は生じるが、衝突は生じない。機能語使用の観点から考えて意味の衝突は避けるが、意味の余剰はありうる。けれどだがしかし不経済で、時に事々しくさえあるので、それを頻繁に行うのはやはり通常ではないだろう。したがって、「さへ」と「だに」の相互承接は非通常的であり、「かもめさへだに」の例をもって「さへ」と「だに」の承接が普通にあったとする判断は妥当でない。

「さへだに」が非通常的な表現だとすると、なぜそれをわざわざ行ったのか。それは、この「かもめさへだに」の歌が「ある童のよめる歌」だからであろう。長沼（二〇二〇）は『土左日記』の童の詠歌六首（一月七日、十一日、十五

日、二十二日、二十六日、二月五日）すべてに「未熟な和歌表現があったり、無知に起因する和歌表現があったりする」（三九頁）と述べ、この歌の「さへだに」をそうした表現の一つとして指摘している。[4]

現在の『土左日記』研究ではこの作品を実録ではなく、文学的な虚構（フィクション）とするのが標準的であり、この詠歌も実際には童のものではなく、作者貫之の作であろう。「かもめさへだに」は、童らしさを演出するためにこの歌に限って試みられた表現で、だから必然的に孤例となったと考えられる。[5]

その一方で、当該歌には童らしくない特徴もある。二つの事態の併存を訝る「らむ」の構文がそれで、和歌独特のこの構文は、勅撰和歌集では三代集に集中して見られる。仁科（二〇二〇）は、その時代の文芸で流行した特別な構文と考察しており、『土左日記』はまさにその時代のものである。流行の和歌の構文に通じているのは、童ではなく、その時代の代表的な歌人である貫之だろう。やはり当該歌は貫之の作であり、「かもめさへだに」は文学的な技巧と見るべきである。

第三節　『土左日記』の童の詠歌

『土左日記』には文法の観点から見て、童らしさの演出と思われる例が他にもある。一月十一日の条である。

(20)　今し、羽根といふところに来ぬ。若き童、このところの名を聞きて、「羽根といふところは、鳥の羽のやうにやある」と言ふ。まだ幼き童の言なれば、人々笑ふときに、ありける女童（をむなわらは）なむ、この歌を詠める。

まことにて　名に聞くところ　羽根ならば　飛ぶがごとくに　都へもがな

とぞ言へる。男も女も「いかでとく京へもがな」と思ふ心あれば、この歌よしとにはあらねど、「げに」と思ひて、人々忘れず。　〈一月十一日、二八頁〉

この歌は通説では「ありける女童」の詠歌とされるが、反対意見があるので、まずそのことを検討する。加藤（一九九八：第六章）は次の三点を挙げて疑義を呈した。

①通説は「ありける」を「ありし」と同義で「前に出てきた、例の」と解し、「ありける女童」をこれ以前の一月七日に登場した「ある人の童」と同一とするが、

「ありける」にそのような意味はない。「ける」は「気づき」で「気がついたら（その時その場に）居合わせた」という意味である。

②通説は「をむなわらは」を「めのわらは」の同義語とするが、「をむなわらは」という語の実在は疑わしい。

③この詠歌の評言に「この歌よしとにはあらねど」とあるが、これは他の童の詠歌と違って厳しい。

そして、「わらは」の下に「て」の脱を想定して「ありける女（をむな）、笑（わら）はでなむ、この歌をよめる」と修正し、「（気がつくとそこに）居合わせた女性が、笑わないで、この和歌を詠んだのだ」（一五四頁）と解する修正案を提出した。検討しよう。

①について、「ありける」が「ありし」と同義でないのはその通りだと思う。[6] しかし、これは「女童」が前出の「ある人の童」と同一か否かという問題には関わるが、「まことにて」の歌が童の詠歌か否かという問題には関わらない。「女童」が「ある人の童」とは別というだけで、「まことにて」の歌はその「女童」の詠歌であるかもしれないからである。この問題に直接関わるのは②である。

②ついて、確かに「をむなわらは」という語は他に用例を見ない。『土左日記』でも「めのわらは」（一月十五日、二十六日）である。当該箇所の「をむなわらは」が誤りであるなら、必然的に「まことにて」の歌は童の詠歌ではない。ところで、次のような例がある。

(21) 正月なれば、京の子の日のことひ出でて、「小松もがな」といへど、海中なれば、かたしかし。ある女の書きて出だせる歌、

おぼつかな　今日は子の日か　海女（あま）ならば　海松（うみまつ）をだに　引かましものを

〈一月二十九日、四〇頁〉

この「うみまつ」も他に例を見ないが、これは和語で「美留」（天治本新撰字鏡・巻第十二）、「和名美流」（元和本和名類聚抄・巻十七）と言われる海藻を指す漢語「海松」を訓読した造語だと考えられる（日本国語大辞典第二版）。この語がここで使われるのは、子の日の小松引きとの関連で「松（まつ）」という語を持ち出したかったからである。

同様に「をむなわらは」も造語ではないだろうか。(20)はこの後に「この、羽根といふところ問ふ童のついでにぞ、

また、昔へ人を思ひ出でて、いづれの時にか忘るる、今日はまして、母の悲しがらるることは。」（二八頁）と、亡児を追懐する場面が続き、東原（二〇一五：一二六頁）は「をむなわらは」を、『土左日記』で亡児を指す「をむなご（女子）」に関連づけている。確かに『土左日記』の亡児は「をむなご」（十二月二十七日、二月四日、十六日）であって「めのこ」ではない。対照的に、他の女児は当該箇所以外「めのわらは」である。

亡児	をむなご
他の女児	めのわらは

このような一種の相補関係の中で、「をむなご」を連想させるために「をむな」を含む「をむなわらは」を造語したと考えれば、この語の存在意義が理解できる。

③について、他の童の詠歌についての評言は次の通りである。一月二十六日と二月五日の歌には評言がない。

(22) a　かくは言ふものか。うつくしければにやあらむ、いと思はずなり。　〈一月七日、二四頁〉

b　いふかひなき者の言へるには、いと似つかはし。　〈一月十五日、三〇頁〉

c　幼き童の言にては、似つかはし。　〈一月二十二日、三七頁〉

これらは手放しの高評価ではなく、童の詠んだ歌としてはよい、あるいは童の詠んだ歌だからよいという評価である。(20)の「よしとにはあらねど、「げに」と思ひて、人々忘れず」と大差あるようには思われない。

なお、加藤の修正案「ありける女、笑はでなむ、この歌をよめる」は「なむ」が「笑はで」の後にあるが、笑う人々の中で笑わない「ありける女」に注目させるのであれば、次例のように「人々笑ふときに、ありける女なむ、笑はでこの歌をよめる」とある方が自然ではないかと思う。

(23)　かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろよくくらべつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりにとかくしつつ、　〈十二月二十一日、一五頁〉

以上のことから、「まことにて」の歌は通説の通り「ありける女童」の詠歌と見て問題はないと考える。

さて、それではこの歌に見られる童らしさの演出は何か

と言うと、「都へもがな」である。格助詞「へ」に終助詞「もが」が後接した例は、この「都へもがな」と直後の「京へもがな」しか見られない。「もが」は〈(事物・事態の)存在の希求〉を表し、前接語は存在詞「有り」の前に来るものである[7]（仁科（二〇一八）小柳（二〇二一））。例えば、(24)aは名詞、bは形容詞連用形、cはコピュラ「なり」の連用形で、すべて「有り」の前に来るものである。

(24)
a　雲もみな　波とぞ見ゆる　海女もがな　いづれか海と　問ひて知るべく
〈土左日記・一月十三日、二九頁〉
b　石走る　滝なくもがな　桜花　手折りても来む見ぬ人のため　〈古今和歌集・巻1・五四番〉
c　心がへ　するものにもが　片恋は　苦しきものと人に知らせむ　〈同右・巻11・五四〇番〉

ところが、「都へもがな」の「都へ」は移動の方向を表すので、「有り」の前に来るものではない。おそらく非文かそれに近い片言の表現で、ここに童らしさの演出を見ることができる。この歌を受けて「男も女も「いかでとく京へもがな」と思ふ心あれば」とあるのは、童の片言を面白がる大人の様子を描くものだろう。

第四節　四方の獣すらだにも

時代は下るが、有名な和歌の中に第二種副助詞「すら」と「だに」の相互承接例があるので、最後にそれに触れたい。『金槐和歌集』の次の歌である。

(25)
慈悲の心を
もの言はぬ　四方の獣　すらだにも　あはれなるかなや　親の子を思ふ　〈六〇七番〉

この「すらだに」もまた孤例である。第二節で述べたように「すら」と「だに」はほぼ同じ意味なので、どちらか一方で事足り、「二語を重ねることによってさらに強調しようとしている」（新潮日本古典集成・頭注）が、明らかに意味の余剰である。この例をもって「すら」と「だに」を重ねる表現が普通にあったと判断することはできず、やはり文学的な技巧と見るべきである。

そもそも和歌では一般に「だに」を使うので、「すら」と「だに」の相互承接は起こらないはずである。『金槐和歌集』でも「だに」はこの「すらだに」を含めて一六例あ

るが、「すら」はこの例以外にない。次例は当該歌と発想の似た歌だが、「だに」だけが使われている。

(26) もの思はぬ　野辺の草木の　葉にだにも　秋の夕べは　露ぞ置きける　〈四〇八番〉

このことから、「四方の獣すらだにも」は「すら」と「だに」が対等にあるのではなく、基本として「だに」を使うところに「すら」が入り込んで来たと考えられる。どこから来たかと言えば、次の『万葉集』の歌であろう。諸注釈書は、実朝がよく『万葉集』を研究し、次の歌を本歌として当該歌を詠んだと解説している。

(27) 言問はぬ　木すら〔尚〕妹と兄と　ありといふを　ただ独り子に　あるが苦しさ　〈万葉集・巻6・一〇〇七番〉

「すら」はこの本歌から来たのだと思うが、合わせて考えたいことがある。当該歌の第四句に「あはれなるかなや」という字余りの句があり、この「かな」と「や」の相互承接は、漢文訓読文で多用されるものである（築島（一九六三：七三八頁））。例えば『今昔物語集』で「かなや」を表記した確例が五例あるが、次のように天竺・震旦・本朝仏法部の巻に限り、本朝世俗部にはない。

(28) a　地獄ニ堕テ久ク苦ヲ受ベシ。悲カナヤ　〈巻3・二〇、一・二三七頁〉

b　一人トシテ還ル事无シ。悲キカナヤ、汝ト我レ、乍生別レナムトス。　〈巻4・二〇、一・三〇二頁〉

c　我レ、年老テ心細ク思ツル間、カク伝ヘ奉ツル事、喜バシキカナヤ　〈巻11・二八、三・一一一頁〉

d　地蔵菩薩化身ニ値遇奉レリ。悲キ哉ヤ、貴哉　〈巻17・一、三・五〇五頁〉

e　忽チ身ニ病ヲ受タリ。音ヲ挙テ叫テ云、「熱キカナヤ」ト云テ、　〈巻20・三八、四・二〇六頁〉

当該歌で字余りをしても「かなや」を使ったのは、漢文訓読文の要素を取り入れたからだろう。「すら」にもこの漢文訓読文の要素という性質が認められる。似た発想の(26)に「すら」がなく、当該歌に「すら」があるという差も、この点に係ると考えられる。当該歌は仏典に由来する「慈悲の心」という題を有することも思い合わせられる。

なお、当該歌の構造は一般に「「四方の獣すらだにも親の子を思ふ」あはれなるかなや」の倒置と理解されている

ようだが[8]、従属節の述語句「親の子を思ふ」と主節の述語「あはれなるかなや」では節レベルが異なるので、「四方の獣すらだにも［あはれなるかなや］親の子を思ふ」という挿入句を含む構造と解する方がよいと思う。「四方の獣すらも親の子を思ふ」と対象の事態を言い終える前に、対象に対する感情が「あはれなるかなや」と吐露されてしまうのである。

おわりに

「かもめさへだに」の「さへ」と「だに」の相互承接は、通常ではない。この相互承接は、『土左日記』という文学作品の中で、童の詠歌であることをそれらしく見せるための演出であり、文学的な技巧だと考えられる。したがって、この例をもって「さへ」と「だに」の承接が普通にあったとすることはできない。

古典文学作品を資料として文法史研究を行う時、場合によっては、その用例がそのようにある個別の事情を、文学作品の表現の問題に踏み込んで詳しく考察する必要がある。このことを考慮せず、全用例をひとしなみに扱う平板な文法記述は時に危うい。自戒を込めて。

資料（表記を私に改めたところがある）

土左日記・古今和歌集・蜻蛉日記・うつほ物語・枕草子・源氏物語・更級日記・栄花物語（新編日本古典文学全集）、今昔物語集（日本古典文学大系）、後撰和歌集・後拾遺和歌集（新日本古典文学大系）、金槐和歌集（新潮日本古典集成）

注

（1）『万葉集』の「だに」と「すら」の用例を参考のために挙げる。

・夢にだに〔夢尓谷〕見ずありしものを　おほほしく
　宮出もするか　佐日の隈廻を
　〈万葉集・巻2・一七五番〉

・春日すら〔尚〕田に立ち疲る　君は悲しも　若草の
　妻なき君は　田に立ち疲る　〈万葉集7・一二八五番〉

（2）ただし、意志・希望・仮定と照応する〈最低限希求〉の用法は上代以来「だに」のもので、「すら」には見られない。『土左日記』から例を挙げる。

・忘れ貝　拾ひしもせじ　白玉を　恋ふるをだにも　かたみと思はむ　〈二月四日、四四頁〉

（3）ちなみに、次のように「ばかり」と「まで」が相互承接した例があるが、これは〈概数量〉の「ばかり」と〈延長〉の「まで」の承接である。（2）の〈限定〉の「ばかり」と（4）の〈極限〉の「まで」は相互承接しない。小柳（二〇〇〇）を参照。

・轅の上にまたさし重ねて、三つばかりまでは少し物も聞ゆべし。　〈枕草子・三三段、七七頁〉

（4）ただし、「限定を表す「だに」と添加を表す「さへ」とを連続させることは、矛盾する表現となり、和歌表現以前の段階、国語表現として破綻した表現となる」（三八頁）という説明には賛同できない。また、後藤（二〇二三）は、「だに」を「「かもめ」という軽いものを挙げて重いものを類推させる表現」（七頁）とし、この歌では「だに」は不要で、「さへ」の「「までも」という添加の語義」（同頁）だけが必要と考え、「さへだに」を「さへただ」の誤写とした。しかし、「さへ」と「だに」の意味は本稿のように捉えるのが適切で、必要なのはむしろ「だに」である。誤写を想定する理由はないと思う。

（5）このような孤例を小柳（二〇一九）では「臨時形の孤例」と呼んだ。

（6）ただし、「けり」をいわゆる「気づき」の意とするのはどうだろうか。『土左日記』の地の文の「けり」に次の例がある。

・この歌どもを、すこよろし、と聞きて、船の長しける翁、月日ごろの苦しき心やりをよめる、　〈一月十八日、三二頁〉

その翁が船の長をしていることに、同船者の語り手がこの場面で気づくのは不自然なので、この「けり」は「気づき」とは考えられない。加藤（一九九八：第五章、一三五頁）は「伝聞過去」の例としている。日記の地の文の「けり」についてはあらためて考える必要があるが、「ありける女童」は「船の長しける翁」と同列に扱うのがよいと思う。

（7）格助詞「を」に後接した例として、『うつほ物語』の次の例が知られる（小田（二〇一五：二四一頁））。

・ここにこそ、今宵の物には、不死薬をもがなと思へ。　〈うつほ物語・楼の上下、③六一九頁〉

しかし、これは底本（前田家本）の「てもかな」を本文

校訂者が意改したものである（新編日本古典文学全集「校訂付記」）。よって、確例ではない。『栄花物語』の次の例は底本（梅沢本）の通りで、確例としてよいかと思う。

・かの花山院の四の御方は、……、殿聞しめして、「かれをもがな」と思しめしけれど、

〈栄花物語・巻第八、①四三四頁〉

また、「を」に直接はしていないが、次のように「を」格成分が現れる例がある。

・荒磯海の　浜の真砂を　みなもがな　ひとり寝る夜の数に取るべく　〈後拾遺和歌集・巻14・七九六番〉

さらに、これらと関係があると思われる「をがな」の例がある（小田（同右：二四二頁））。

・好き好きしき下衆などの、人などに語りつべからむをがな　〈枕草子・九四段、一八三頁〉

・修法はまた延べてこそはよからめ。験あらむ僧をがな。

〈源氏物語・宿木、⑤四〇七頁〉

こうした例から「を」に「もが」が後接することはあったと考えられ、そうすると、「有り」の前に来ない語にも「もが」が後接したことになる。この種の例は上代にないので、中古に変化があったと考えられるが、右の諸例からわかるように、一貫して〈存在の希求〉を表している。「都へもがな」「京へもがな」はやはり異例である。

（8）新編日本古典文学全集『中世和歌集』は「第四・五句の字余りによる倒置表現」と明記する。明記していない注釈書も「親がその子をいとおしんでいる様子には、まことに胸に迫るものがある」（新潮日本古典集成）のように現代語訳するものが多く、これは原文を倒置と解した上で語順を正した訳だと推察される。

参考文献

岡崎正継（一九九六）『国語助詞論攷』おうふう

小田勝（二〇一五）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院

加藤浩司（一九九八）『キ・ケリの研究』和泉書院

後藤康文（二〇二三）「『土佐日記』不審本文考（一）」『北海道大学文学研究院紀要』170

小柳智一（一九九七）「中古の「バカリ」と「ノミ」」『国学院雑誌』98―12

小柳智一（二〇〇〇）「中古のバカリとマデ―副助詞の小さな体系―」『国学院雑誌』101―12

小柳智一（二〇〇三）「限定のとりたての歴史的変化―中古以

前―」沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて―現代語と歴史的変化・地理的変異』くろしお出版
小柳智一（二〇〇八）「副助詞研究の可能性」『日本語文法』8―2、日本語文法学会
小柳智一（二〇一九）「孤例の問題―規範と文法変化―」『国語学研究』58、東北大学大学院文学研究科
小柳智一（二〇二一）「文法史と文法史研究―「古典文法」の背後にある面白さ―」『信州大学人文科学論集』9号第1冊
小柳智一（二〇二三）「中古の副助詞「さへ」―〈添加〉の意味―」『国語と国文学』100―4
築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
長沼英二（二〇二〇）「土左日記の児童詠歌」『表現研究』112、表現学会
仁科明（二〇一八）「「ある」ことの希望―万葉集の「もが（も）」と「てしか（も）」―」沖森卓也編『歴史言語学の射程』三省堂
仁科明（二〇二〇）「中古の「らむ」―体系変化と用法―」『日本語文法史研究』5、ひつじ書房
東原伸明（二〇一五）『土左日記虚構論―初期散文文学の生成と国風文化―』武蔵野書院

付記　大学院生の時、和田利政先生から、文学作品を資料とする時はそれが文学作品であることを忘れてはならないとご指導賜った。先生がその時に例に挙げられたのは『土左日記』だった。この小論を謹んで奉る。

なお、本研究はJSPS科研費JP17K02787の助成を受けたものである。